

# 李登輝前総統、「日本語族」に会って学んだこと

「日本は虚構の束縛を受けずに、自由意思に基づいて国民意識の統合を実践すべきだ」  
李登輝・台湾前総統の重い言葉を聞いた。日本では忘れ去られたような、「美しい日本語」を守る人たちがいた。日本のこころ、日本語の大切さ。それを、私たちは台湾合宿で「再発見」し、学ぶことになった。

村田裕介  
（経済学部経済学科3年  
中川洋二郎ゼミ）

中川（洋一郎教授）ゼミとしては、これが通算3度目の台湾合宿になる。昨年11月2日から7日まで5泊6日の日程で、教授と一緒にゼミ生14人が参加した。

台北市内からバスで1時間半ほど、桃園県龍潭（ロンタン）の渴望学習センターに着いた。台湾前総統である李登輝氏の第3回李登輝学校研修団の特別講義が行われる。私たちが参加できたのは、「李登輝友の会」の協力があってのことである。金属探知機による検査を受けて教室に入り、研修団の方々や日本の特派員記

## 李登輝前総統の特別講義

者らとともに、1時間半にわたる講義を聴講した。

「私は誰だ？ 新時代、台湾人の道」と題する講演で、李氏が強調するのは「国民がidentityを持ち、国として団結せよ」「国を力強く、頼りになるように指導していける指導者を持つ」というメッセージだった。identificationが強ければ団結でき、団結できれば指導者も今日、明日ではなく、数年後を見据えた行動ができる、と国家のあり方をじゅんじゅんと語った。

ではidentificationを持つにはどうしたらよいのか？ ここから、哲人政治家らしい深い考察が始まる。

「私は誰だ？」という問いをひたすら考える必要がある、と氏はいう。そして、李氏が導き出すのは「私ではない私」という認識である。

ふだん考えたことのないような問題設定に、ゼミ生は、背筋を正しながら聞き入った。

## △私ではない私▽

李氏はキリスト教徒だが、座禅を組んで理性、感情、意識形態、「場所の論理」（西田幾多郎）を総合して「私は誰だ？」という問いに答えを出すそうである。

「『自我超越』が禅の精神であり、非常に意義のあるものである」と李

氏は指摘する。

臨済宗では我々の肉塊の上に「無為の真人」がいる、と説く。無為の真人は我々が見たり、聞いたり、考えたりしているところには必ず存在していて、目、鼻、耳、口から出入りしているようだ。

これに、ニーチェの「超人思想」が重ねられる。大著『ツァラトゥストラはかく語りき』のなかでニーチェは「人間の精神は3段階に変化していく」と主人公に語らせている。ラクダ、獅子、幼子である。

「幼子、これが超人であり、この超人というのが無為の真人である。無為の真人とは個人を超越したものであり、△私ではない私▽である」

このように、禅とニーチェがリンクする。刺激的な解釈である。こう続いた。「我々はこのようなことを考えていくことによって、外界の者に動かされないようになる。個人が主になって、自分で発展していくのだ。外物は変化している。人

間がはつきりした思想を持たないなら、結局動揺ばかりするようになるのである。今の台湾人のように」

### 虚構から脱せよ

日本と日本人についての指摘は重

いものがあった。

「昔の日本人は（私でない私）を超越したもの」を求めていた。しかし、現在の日本は過去の虚構や歴史教科書問題という作られた虚構の中で混迷している。台湾も同じだ。



李登輝氏（中央）を囲んで、中川教授（左）とゼミ生一同

台湾の歴史は大陸に繋がっている。虚構の束縛を受けずに、自由意志に基づき「新時代の台湾人・日本人」として国民意識の結合を實踐していかなければならぬのである」

ば、李登輝氏が台湾人初の総統と なってから、国民中学一年の教育課程に「認識台湾（台湾を知る）」という科目が導入され、中国大陸の歴史から離れて自らの台湾史を系統的に学べるようになったそうだ。講演のあと、私たちは李氏と一緒に記念写真を撮る機会にも恵まれた。気軽に応じていただいたのである。これも思いがけないことだった。

### 「友愛会」談話会

「友愛会」の方々とお会いできたのも、台湾合宿の大きな収穫だった。「美しく正しい日本語を台湾に残そう」として日本語の勉強をしている人たちである。

『台湾万葉集』（岩波書店1994年刊）は日本でもずいぶん話題になった。「万葉の流れこの地に留めむと生命のかぎり短歌詠みゆかむ」——植民地下に日本語で育った台湾の人たちが編んだ大衆歌集だ。最近では『台湾俳句歳時記』（黄靈芝著

／言叢社2003年刊）も出版され、その水準の高さが日本人研究者たちの注目を集めた。

友愛会の会員は現在126人（うち日本人27人）。「日本語族」とも呼ばれ、新聞のほかNHKでも取り上げられたこともある。

私たちは、会員の方々と「日本語」で会話しながら、台湾を知り、また日本、そして日本語について教えられることが多かった。

### 日本よ知恵を貸せ 台湾と正常な関係を

劉添根氏は1941年、10歳のときに広東から台湾に渡ってきた。氏の表現では、「日本人は平和であるために外国語を話すことができる」という。自身の波乱の人生とかわっている。

劉氏は客家、北京、台湾、日本の4カ国語を話すことができるといって、それを生かし、通訳として働いている。「広東から渡ってきた際は中国人



友愛会との懇談は「日本語」で、通訳なしの近しさだった

だったため学校へ行くことができなかったが、疎開の波の中で学校に入学し、43年から2年間日本語を勉強した」という。ここには、時代の波にのみこまれ、さまざまな言語を習得しなければならなかった悲哀がある。「台湾は現状を維持していくべきだ。日本は知恵を貸してほしい」

と劉氏は訴えていた。楊應吟氏は鍼灸医である。思いをこめて語る内容には厳しさがあつた。「台湾と日本は戦時中、兄弟のごとく外敵と戦つてきた。21万名の台湾軍人、軍夫、高砂義勇隊が戦地に赴いた。2万8000柱が靖国神社に祀られているんです」「我々が受けた日本の教育

では、嘘つきは絶対に許されない行為だと言われ、嘘つきは泥棒の始まりだとも教えられた。しかし日本の文科省は、日本の将来を担う子供たちを騙してまで、嘘の教科書で教育している。分かった間違いを間違いだと言え

ない」「台湾は国際社会に認められないが故に、多大な犠牲を払つてきた。こんな惨めな民族になつたのは日本が戦争に負けたからだ。その責任を取つて日本は台湾が正常な国家になれるよう手を貸すべきである。日本のために命をささげて戦つた台湾人に対し、陳謝の意もなく無視し、横着な中国にはべこべこ頭を下げて謝罪して、彼らの言いなりに弁償金や援助金を払つているのは甚だ不公平です」

そして「このままだと我々日本語族はだんだん少なくなり、やがては台湾の好日は抗日に移り変わっていくことになるでしょう」という言葉にハツとなった。

### 「日本語」と「武士道精神」

友愛会会員の平均年齢は72歳、医者が多いという。月1回の例会を開いている。

懇談会では台湾料理のもてなしも受けた。どれもおいしかった。

「この料理は『仏跳牆』(フオテャオチアン)といって 仏が塀を飛び越えるほどおいしい」という意味ですよ」

「テレビドラマなどで何気なく映る書物に日本を感じることはありませんね」

ゼミ生は隣り合わせた会員と、そんな会話も楽しみながら。

新渡戸稲造の『武士道』の話を聞いたゼミ生もいる。「武士道とは一言でいうと、義の一語に尽きる」と。

「日本人は、大和民族の誇りをもつてほしい」という言葉もあつたようだ。台湾の「日本語族」の人たちにとつて、「美しい日本語を守る」と「武士道精神」は同義語であるように思えてくる。一様に感じるリンとした姿勢に圧倒されたといつていい。

日本人への若者たちへのメッセージを、と持ちかけると、楊氏はこう語つた。

「漢字を大切にしてください。台湾をもっと知ってください」